

しんじつのしょうめい

人間科学部
人間科学科2年

小原裕人

新学期が始まってから二週間が経ちました。身体測定や自己紹介。委員会、係決め。新入生歓迎会などがとんとん拍子に終わり、ようやく落ち着き始めた頃です。

三階にあるこの教室から見える景色も、淡紅色から鮮やかな緑色に移り変わろうとしています。窓枠を額縁に見立てた自然の絵画を眺めていた私は、溜め息をつきました。

「おはよう、なつき。今日の溜め息は一段と深いねえ」

両手で頬杖をついた私の眼前で手を振っているのは、ともこちゃんでした。

「おはよう」

消え入りそうな声で辛うじて挨拶をした私は、力なく机に体を預けました。

「うわ、なつき重症。でも、そうだよ。な。まゆが学校休んでから一週間だもんね……」

明るく振る舞っていたともちゃんも伏し目がちになってしまいました。

汚染されたんだよ」

「私、うつたりしてないかな」

教室のどこからか聞こえたその言葉に、私は息が詰まりそうになりました。

やめてよ。汚染？ そんなわけないよ！

先生が気を取り直して出席確認を再開したことに気が付かず、ただ自問自答の渦に飲まれていました。

「根元いおり」

「はい」

違う。まゆちゃんは、そんな……。

「牧川なつき」

だって、あの事故は大丈夫だって――

「おい、牧川なつき」

「は、はい！」

名前を呼ばれていたことに気が付き、私は慌てて返事をしました。

先生は怪訝な顔をしていましたが、何も言わずにホームルームを終わらせました。

私は火照った顔を手で覆い、深く息を吐きました。そして、空っぽになっているまゆちゃんの席に目を向け、あの事故さえなければ、と心の底からそう思いました。

それは、ちょうど八日前のこと。町の外れにあ

真っ白な空間に私たち二人だけ張り付けられたように、無音の時間がゆっくりと流れていました。それはとても息苦しいものでした。

そんな息苦しさを、ホームルームの始まりを告げるチャイムが遠慮なく破ってくれました。

「元氣出しなよ、なんて酷だけど、あたしたちが落ち込んでいたらさ、まゆもきつと悲しむよ」

振り絞るようにそう言ったともこちゃんは、ぎこちなく笑ってみせると、そのまま自分の席に戻って行きました。彼女の後ろ姿を見つめ、ちょっと強がっているね、と私は呟きました。でも、ともこちゃんの言う通り。まゆちゃんが戻ったときに笑顔で迎えられるように。私たちが元氣でいなくちゃ。

ともこちゃんは、この中学校で知り合った初めての友達。いつも明るく、行動力があって、数学が苦手で、少し寂しがり屋で。私の大切な友達です。

そしてもう一人、私には大切な友達がいます。

る薬品工場で爆発事故がありました。

幸いにも死傷者はず、薬品が工場の外に漏れる心配もない、とのことでした。話はそれで終わるはずでした。ところが爆発事故の翌朝、妙な噂が流れていました。

薬品が工場から漏れて、東の森が汚染された、と。

東の森は薬品工場の近くにある森のことで、私とまゆちゃんが初めて出会った思い出の場所でもありました。

それでも、根も葉もない噂です。私は真に受けることはしませんでした。クラスの人たちも初めは驚きや不安を口にしていましたが、ここからは結構離れているということもあり、深く気に留める人はいませんでした。この瞬間までは。

「昨日、東の森に入って行くまゆを見た」
不意に根元さんが独り言のようにぼつりと、そう呟いた刹那、教室が静寂に飲み込まれました。皆の視線が集まり、根元さんはおっかなびっくり話を続けました。

「わ、わたしは遠くから見ただけで。でも森が汚染されたっていう噂がもし本当なら、まゆも……汚染されちゃっているかもしれない」

根元さんの言葉に、教室にいた全員が凍りつきました。しばらくした後、ゆつくりと氷が溶ける

優しく、照れ屋で、歌を歌うのが上手で、意思が強くて。

扉がガラガラと音を立て、担任の谷田先生が入ってきました。

「よし、ホームルームを始めるぞ」

ジャージが似合う男勝りな先生は、朝の挨拶を終えると出席を取り始めました。

「会沢ともこ」

「はい」

この中学校は三年生になるまでクラス替えはなく、担任の先生も基本的にそのまま持ち上がりです。そのため新鮮さはありませんが、顔見知りばかりなのは幾分か気が楽です。

「田波まゆ。――体調不良か」

友達の名前が呼ばれ、私は反射的に顔を上げました。教室内もわずかにざわめきが起こっていました。そのざわめきの中から微かに嫌な会話が聞こえました。

「田波さん、東の森にいたんでしょ。やっぱり、

ようにして話し声が染み出しました。

「それさ、本当なの？」

「でも、いおりの言うように例の噂が本当でしたら」

「それってやっぱり、人に感染するのかな」

「やめてよ、そんなわけ……ないって言い切れるのかな」

皆の声が針のように耳を通り抜け、私の意識は朦朧としていました。ただ、どす黒いものが胸の奥でうごめいているのだけは、確かに感じていました。

張り詰めた教室の空気に亀裂が生じたのは、扉が開かれたときでした。

「おはよう」

まゆちゃんでした。優しい微笑みを浮かべた彼女がそこにいました。

感熱紙を力任せに破いたような衝撃が教室中を駆け巡りました。安全であるはずの領域が、突然発生した不安要素によって侵されると、人は本能的に自分を守ろうと躍起になります。まゆちゃんはそんな私たちの異変に気が付き、首を傾げました。

「皆、どうしたの？」

「ちよっと、お手洗いに」

何人かが連れ立って教室を飛び出しました。

「ねえ、何があったの」

まゆちゃんの手が触れようとした瞬間、根元さんは短く悲鳴を上げて後ろに飛び退きました。それを見たまゆちゃんは慌てて手を引つ込めました。

細い腕に力を入れ、深呼吸をした根元さんは静かに言いました。

「まゆ、昨日の薬品工場の事故は知っているよね？」

まゆちゃんはこくりと頷きました。

「その事故が起こった後、東の森に入ったよね？」

まゆちゃんは根元さんが言おうとしていることを理解したのか、険しい声で返しました。

「入ったよ。でもそんなことで――」

「まゆ、ごめん」

言葉を遮った根元さんは、最悪の可能性を信じてはつきりと告げました。

「あんた、汚染されているかもしれない。だから、わたしたちが安心できるようになるまで学校には来ないで」

それはあまりに冷たい言葉でした。まゆちゃんはたじろぎました。そして、私と目が合った瞬間、唇を噛み締めて教室を飛び出しました。

このとき私は気付くことができました。大切な友達に向けていた視線に、恐怖と憎悪

「田波に言われたからだ」

「それは、どういうことですか」

先生は、凜とした目を真っ直ぐ私に向けて語り始めました。

「二週間前、あいつは学校を飛び出す前に私のところに来た。ほとぼりがさめるまで学校を休みますって伝えるために、な。それから私に、家には電話しないでくださいって手を合わせたんだよ。だけど不登校を黙認した挙げ句、親御さんにも連絡しないなんて教師失格だろ。私に仕事させない気かって言ったら、あいつ何て答えたと思う？」

私は思案顔で首を傾けました。

「両親に余計な心配かけたくないって、あいつそれを聞いた私は切なくなり、目を閉じました。教師が言う台詞ではないが、直接家に行くとなると田波の親御さんに気付かれる恐れがある。だから許可できない」

生徒との約束を破るわけにはいかないからね、と先生は付け加えました。

「会沢さんは何て答えましたか？」

「あいつは田波に会うことより、田波の現状が知ることが目的だったみたいで、元氣だと教えたら納得してくれたよ」

「あの、田波さんに会うこと自体は大丈夫です

が入り混じっていたことに……。

今日の授業のことは何一つ、私の頭に入りませんでした。

あの日から一週間が過ぎた今、私はどうすれば良いのか。ひたすらそのことだけを考えていたのです。一日中俯いていたので、ともちゃんが氣遣ってくれました。

「まゆは元氣だよ。もうすぐ会える、きっと笑顔で会えるよ」

そのおかげで一つの答えに辿り着きました。

まゆちゃんの家に行こう。

盲点でした。現状を知るには本人に会うしかありません。元氣だというなら会いに行っても大丈夫だということです。でも、ともちゃんは何故まゆちゃんが元氣だと断言したのでしょうか。それを訊ねようとしたが、ともちゃんはすでに委員会の集まりに行ってしまった後でした。

「牧川、ちょっと話があるんだが」

放課後、廊下を歩いていた私は先生に呼び止められました。何の話だろうと思った私でしたが、今朝のことを注意されるのではないかとという考えに至り、背筋を伸ばしました。そして緊張の面持

よね？」

私は恐る恐る訊ねました。

「会ってどうするかは別だが、それは問題ないだろう。だが、田波に会える場所の心当たりがあるのか？」

「はい。きつと東の森にいます」

思い当たる場所はそこだけでした。

「あの日も田波はそこにいたと聞くが、あの森に何かあるのか？」

「東の森は田波さんと私にとっての大切な場所です」

私は小学校三年生だった当時のことを話しました。

「ちょうど梅雨の時期で、その日は一日中雨でした。下校途中、私は東の森の前で泣いている子を見つけました。どうしたのかと声をかけたら、いじめっ子に上履きを森の中に捨てられたと答えてくれました。それが田波さんとの初めての出会いでした。田波さんは当時、お父さんの転勤でこの町に来たばかりで、よくいじめられていたそうです。たぶんそのときに両親を心配させていたのだと思います。だから、これ以上心配かけたくない。転校生の田波さんは森のことを全然知らなくて、私が案内して一緒に上履きを探しました。森の中を流れる川の辺りで上履きを見つけた。

ちで応接室に入りました。

「あの、お話というのは何でしょうか」

先生は来客用のソファに私を座らせ、その向かい側に座りました。

「お前、田波の家に行こうとしていないか？」

その問いかけは意外であるとともに、凶星でした。

「今朝の様子と、放課後の様子を注意深く見比べたらきつとそうだと思った。それに、お前で二人目だからな」

「二人目？」

「今日の昼休み、会沢が田波に会いたいつて私のところに来たんだ。お前と似たような様子だったよ」

なるほど。さっきのともちゃんの発言は先生に聞いたものと分かりました。

「田波さんに会いたいです。今更かもしれない。会うのは正直怖いです。でも、このまま何もなかったら絶対後悔する。だから、家に行って直接話をしようと決意しました」

「ふむ。だが、田波の家に行くことは許可できない」

私は意志を簡単に折られ、少し苛立ちました。

「何故ですか。何で先生の許可が必要なのですか」

たときの彼女の嬉しそうな笑顔は今でも覚えています。それ以来、田波さんはその場所がとても気に入ったみたいで。お互い別の小学校に通っていたので、放課後に森で会う約束をして、毎日のように、毎日のように……遊んでいました」

話し終えたときには私の視界は涙で歪んでいました。

「悔しい。本当に悔しいです。思い出の場所が、彼女を苦しめることになるなんて――」

泣きじゃくる私を柔らかな感触が包みました。先生が優しく抱き締めてくれました。

「牧川の話聞いて安心した。大丈夫、田波は強い。でも、気丈な人ほど誰かに甘えたいものさ。人は自分で自分を抱擁することができない。こうして誰かにしてもらえないのさ」

だから、牧川が田波を抱擁してあげな。先生は囁くように言いました。

私は鼻をすすり、目元を拭きました。

「焦らなくてもいい。ここぞつてときは必ずやって来るからな」

先生の言葉を胸に刻み、私は学校を出ました。

私は東の森の前で立ち止まりました。強い風が吹き、木々がごうごうと唸ります。決意して森

へ入ろうとした私ですが、足が動いてくれません。学校を出たときはあんなに気持ちに余裕があったのに。

――薬品。汚染。有害。

断片的な単語がどうしても思考に貼り付いてしまつて取れません。私の心は、見えない敵による恐怖ですつかり埋め尽くされてしまいました。自分の心の弱さに唇を噛み締めます。

結局その日は森に入ることができず、まゆちゃんに会うことはありませんでした。

翌日の授業後、先生が書類の束を抱えて教室に入るなり、教卓に叩きつけるように置きました。全員驚いて先生に注目しました。

「これが何か分かるか」

態度とは裏腹に、先生は静かな口調で話しました。

「この紙には、例の薬品工場周辺一キロ圏内の汚染濃度が書かれている。私が何人かの専門家をお願いして、この一週間の間に何度も調査してもらったものだ」

先生は書類を掲げて言いました。

「圏内全域において汚染の確率はゼロだ」

その一言に私を含む全員が目を丸くしました。

に俯いている根元さんの姿がありました。

「いおり」

「まゆ。わたし、わたしのせいで――ごめんなさい」

根元さんは深々と頭を下げて謝りました。まゆちゃんは笑顔で応えました。

「いおりのせいじゃないよ。悪い夢に苦しめられて辛かったでしょう？」

その言葉だけで十分でした。根元さんも泣きながらまゆちゃんに抱き付こうとしています。そんな私たちを見ていたともちゃんは溜め息をつきました。

「二人とも泣いてばかり。せつかくの仲直りが台無しじゃない」

「そう言いつつ、お前も泣いているじゃないか。ほら、行って来い」

いつの間にかともちゃんの横に立っていた先生が背中を押した途端に、ともちゃんも涙を流しながら私たちのところへ駆け寄りました。

「先生のおかげです。ありがとうございます」

三人に抱き締められたまゆちゃんは先生に感謝して、満面の笑みを浮かべます。先生は照れ臭そうに笑っていました。

川の中でいつまでも抱き合う私たち四人。かけがえないひとときでした。

「田波は、真実が証明されるまで一週間耐えた。立派だよ、あいつは。東の森が汚染された？　そこにいた田波も汚染された？　冗談じゃない。確かめせずに根も葉もない噂を鵜呑みにしたり、根拠のない出鱈目を信じたりする方がよっぽど汚れている」

一呼吸おいて先生は続けました。

「田波は誰のことも恨んでいない。真実を知ってどうするかはお前たち次第だ。だけど、これだけは言わせてもらう。人の価値観は様々だ。嫌いなら嫌いでもいい。ただ、一方的に排除するのは絶対にやめろ」

それは決して反論を許さない、圧倒的な言葉でした。すすり泣く子がいる中で、ともちゃんは立ち上がりました。それを見た私も反射的に立ち上がり、気が付けば教室を飛び出していました。ともちゃんの他にもう一人、教室を出たのが見えた気がしました。

私は通い慣れた通学路を、脇目も振らず走りました。途中で何度も躓きました。家の前を通り過ぎ、東の森を目指して休みなく走り続けました。森に辿り着く頃には疲労困憊でした。森は昨日と同じ佇まいで私にその存在感を示しています。しかし、今は何も怖くありません。私は堂々と森に足を踏み入れました。

東の森には色々なものが隠されます。上履きも、真実も、涙も、笑顔も。

久しぶりに入った森はひんやりとして心地良く、汗が冷たく感じられるほどです。濃い緑の匂いが鼻腔をくすぐります。木々の間を縫うようにしてしばらく歩くと、やや開けた場所に小さい川が見えてきました。懐かしいせせらぎに耳を澄ましていたそのときでした。

「なつきちゃん」

その澄んだ声の主は川の水に素足を浸し、丸い石に座って本を読んでいた。

制服姿のまゆちゃんでした。

「まゆちゃん！」

私は慌てて靴も靴下も脱ぎ捨てると、川の中を歩いて行って親友に飛び付きました。

「ごめんね。私、まゆちゃんに酷いことした」

私に抱き締められたまゆちゃんは照れ笑いを浮かべました。

「いいよ。きつとここにきてくれる、そう信じていたから」

私が目到大粒の涙を浮かべていると、背後から荒い息遣いと声――。

「やつと追い付いた。こら、なつき！　笑顔って言ったでしょ、ちゃんと笑って！」

振り向くと、私の脱ぎ散らかした靴や靴下の横でともちゃんがガッツポーズをしています。そして、ともちゃんの隣には申し訳なさそう